

相手と二人だけの世界を持つ

目次

- 0 . はじめに
- 1 . 動機：信頼関係による相乗効果
- 2 . インタビュー
 - 2 - 1 : 現在にいたるまでの経歴
 - 2 - 2 : コミュニケーション観
 - 2 - 3 : 家族観
 - 2 - 4 : 疲労と元気の源
 - 2 - 5 : 視点の違い
 - 2 - 6 : 4 つの形容詞
 - 2 - 7 : コミュニケーションの意味と意義
- 3 . 結論：技術より心
 - おわりに：日本社会に暮らすこととは何か

0 . はじめに

言語学を専攻し、人とのコミュニケーションを大切にしている私には、「魅力的」な友人、知人が多くいる。何かに秀でた才能を持っている人、気配りに長けている人、穏やかな雰囲気を出し出す人・・・皆、それぞれ違う形の「魅力」を持っている。

今回、「魅力のある人」へのインタビューを始めるにあたって、「魅力」という言葉の意味を再考させられた。それまで私は、容姿あるいは表情など、あくまで外面的な「魅力」にとらわれていたからだ。しかし、熟考の末、私はひとつの結論に達した。「魅力のある人」とは、自分をよく見せたい、悪いところを見せたくないという肩肘張らずに、ありのままの自然体で人付き合いのできる人なのだと。一緒にいて居心地の良さを与えてくれる信頼関係で成り立っている人こそが、私にとっての「魅力のある人」なのである。

特に、昨今の世界では、仕事上だけのつきあいや、社交辞令などで「広く、浅く」という関係だけで済ませようとする輩が多い。「広く、浅く」というつきあいは、相手の外面しか見ることができない。「深く、狭く」というつきあいに発展しない限り、相手の本当の姿、いわば相手の内面的な良さまでも知ることは不可能だ。この「広く、浅く」というつきあいは、私にとって退屈極まりないものであり、日本の留学生活でも大きな悩みの種となっている。私はいつもどんな人とも「狭く、深く」という関係でありたいと願っているのだ。いくら仲良くなりたくても、相手にそっぽを向かれたり、こちらの思いが一切届かなかったりする。何故それが起こるか、また、それが起こらないようにどうするのがよいか、いつも考えさせられる。

筆者が強く望む「狭く、深く」というつきあいまでに友情を発展させるには、相当な努力を要し、疲労感に襲われることもあるが、信頼関係を築き上げた友人、知人は、私にとっての大きな財産のひとつとなっている。もちろん性格上の違いから馬が合わず、社交辞令だけで終わってしまうつきあいもある。しかし、それを恐れていては、せっかくのコミュニケーションの機会を逃してしまうことになり、人の「魅力」を感じ取ることができなくなってしまう。コミュニケーションこそが、相手の「魅力」を知る最大の武器なのだ。

このレポートは「言語文化」の授業で行われたプロジェクト・ワークの一環で、「私が魅力を感じる人」をテーマに、特定の人物に焦点をあて、その人の「魅力」を掘り下げてまとめ上げたものである。

相手のコミュニケーション観を知り、自分自身のコミュニケーション観を振り返ることが、このレポートの大きな課題であると受け止め、インタビューに臨んだ。

1．動機：信頼関係による相乗効果

さて、今回私が「魅力のある人」としてインタビューしようと思った女性は、私が家庭教師を務めるごく平凡な家庭の主婦である。彼女と知り合ったのは、モスクワのホテルで、かれこれ2年前のことだ。知り合いに頼まれて、彼女とその家族のロシア旅行でのガイドを手配したことによる。彼女はロシアに興味を持っていて、それ以前にも何度かロシアへ友人とともに訪れている。ロシアへの訪問のたびにますますロシアへの興味が増し、ロシア語を勉強する決心をしたという。彼女と東京で再会したとき、私は真っ先にロシア語の家庭教師を依頼された。彼女は、今は専業主婦だが、以前は約20年間会社でOLとして働いていたことがある。獣医学部を目指している受験生の娘と主人と3人で暮らし、主婦業に追われることなく、生け花、ロシア語、英語、ボランティアでの日本語指導など、幅広い趣味を持って多方面で活躍中だ。そして、一緒にいても話題が絶えない優れた話術も持っている。

当初、彼女とも「広く、浅く」というつきあいになるだろうと予想していた。しかし、彼女は私と同じ様にコミュニケーションを大切にしている人だったのだ。家族を支え、多方面で充実した活動をも行い、いつも好奇心旺盛で人とのつきあいもおさなりにしていない。ロシア語を勉強しようと思ったのも、大好きなロシアのことをもっと知りたいからであり、ロシア人やロシアとのかかわりのある人々との交流の機会を多く持ちたいと願ったのことだろう。コミュニケーションなしでは、その地域の人々を知ることは不可能だと本能的に感じ取っているのだ。人との深いつきあいを心底願っている。

だが、実際に彼女のところへ家庭教師として行ってみると、彼女は、私にロシア語でなく、英語の家庭教師をお願いしてきた。もちろん、英語はロシア語よりはるかに需要が高く、英語をマスターすることにより、ロシア人に限らず多くの国の人々と交流を持つことができる。しかし、私はロシア人だ。英語も話すことはできるけれども、なぜ、彼女は私に英語の家庭教師を頼むのか。これは理解に苦しんだが、答えは簡単だった。新しいネイティブな英語教師を雇って「広く、浅く」というつきあいを一から始めるよりも、すでに信頼を寄せている私から英語を学ぶことを選んでくれたのだ。彼女は、絶対的な信頼を私に置いてくれている。私と一緒に英語を学びたいという単純で、素直な気持ちに心打たれた。だからこそ、私はこの女性に大変「魅力」を感じたのだ。そして、彼女の「魅力」の根源を探り当てべく、インタビューに臨むことにした。

2．インタビュー

2 - 1：現在にいたるまでの経歴

彼女にインタビューをする前は、彼女がどのように「広く、浅く」というつきあいから、「狭く、深く」というつきあいまでに友人関係を発展させていくのか、また、彼女の元気さ、向上心はどこからくるのかを知りたいからである。そして何より、彼女は私に信頼を寄せてくれているので、本音でインタビューに答えてくれるだろう。その彼女の魅力を知ることにより、自分もより内面的に成長していきたい、そういった理由他ならない、と筆者は考えていた。そして、彼女とのインタビューに臨んだ。まず、彼女の現在に至るまでの生き方や経験について質問をした。彼女は、四国に生まれ、高校卒業後、岡山の大学に行き、生物学を勉強した。その後、大阪に住み、東京に越してきて28年経ったそう。

色々なアルバイトを経て、ISOで消防関係の仕事を始めた。どうして専門を生物から消防に変えたかというと

「外の世界が好きだから」

というとても素直な答えが帰ってきた。その後、彼女は貿易会社に就職し、通関事務の仕事を始めた。

彼女がいろんなことに興味を示し、チャレンジしてきたことが、すでに明らかになった。生物専攻、いくつかのアルバイト、消防関係の仕事、貿易事務などまったく関連性のないものだが、多方面への興味は、若いころから今まで変わることなく続いているとうかがえる。

2 - 2 : コミュニケーション観

その後、友達について聞いてみた。

「友達は多い方だけど、うちの夫のこと、子供のことしか話さない人はちょっとごめんね。」

ここできつと「狭く、深く」という友人関係に話が進んでいくだろうと筆者は期待を抱かせ、さらに踏み込んだ質問を続けていく。

「自分のことを持っていない人は面白くない、自分が好きじゃないと駄目。」
と言う。「自分のことが好き」は確かに難しい問題である。「自分を尊敬できない人は、他人も尊敬できない」という名文句を思い出した。たしかに自分を持っていない人ほど哀れなものはない。ただし、エゴイストになってはいけない...とここで筆者は勝手に感傷に浸ってしまった。

次に、相手のコミュニケーション観を知るために、筆者は彼女の人との接し方について話を進める。筆者がここで取り上げた、単純だが、分かりやすいコミュニケーションの見方を彼女に提示する。一体彼女は「広く、浅く」または「深く、狭く」人と付き合おうとしているのだろうか。「広く、浅く」の人もあるが、深い人は深くて30年も付き合い合っている人もいると言う。筆者は付き合い合っている期間について聞いたわけではない。付き合いが長い人と必ずしも「深く狭く」という関係ではないと思うが、彼女は筆者より長いスパンで物事を観察することができるだろうと思いあまりここで立ち止まらないことにした。社交辞令で人と接することが多いかどうかと聞いた。

「あまりそういう人と話したいと思わない。面白くない。やっぱり話しをする以上、思っていることや自分の心の内を話したい時があるでしょう。それをこの人となら話せる。話を持っていけると印象があるとお話できるし、しょうがないかなとうこともたまにはあっても、それでもちょっとごめんなさいってかんじ。気持ちの上では。」

という言葉が返ってきた。

話は戻るが、家族のことばかりを話す人には、自分をさらけ出して話ができない。お互い自分のことをさらけ出して話すということが相手の理解にもつながり、本当の自分を知ってもらえることができる。「深く、狭く」というコミュニケーションの第一歩は、お互いのことを理解し合うということか。

「挨拶だけにしておこうとかランク付けができてしまう人もいる、自分の内面まで話したくない人もいる。」

ランク付けをするという、意外な答えが返ってきた。「浅く、広く」と「狭く、深く」というつきあいをはっきりと区別し、「狭く、深く」というつきあいだけを本当に大切にしているようだ。「浅く、広く」というつきあいは友人関係に含めないのかもしれない。

筆者も彼女もここで「浅い」、「狭い」、「深い」、「広い」という4つの形容詞の中でさまようことになるが、筆者は今度「深い関係」になれる人について聞いた。自分が相

手に対して「自分を持っている」人という直感だと言われた。さらに、深い関係になれる相手の性格について聞いてみたところ、

「自分を持っている人、ある意味で世の中の一般常識を全然気にしない人」

と言う。一般常識とは何と聞くと「社会的にこうだよ」という周りの目である。この人は、一般常識という枠にとらわれず、自由に生きたいと強く願っていると思った。自由とは何かとずっと考えていた筆者は結局完全な自由があり得ないという結論を出している。しかし、この人にとっての自由とは、反発から生まれた自分の意思を押し通すことから始まっている。やがてその意思が膨らみ、いろんなことをしてみたいという好奇心へと変わっているようだ。

2 - 3 : 家族観

次に家庭生活を始める時の心境について聞くことにした。結婚してしばらく働いていたが、娘が生まれて2歳半になった時、夫が大阪支所に転勤になった。娘に父の不在がトラウマになるだろうと思い、思い切って仕事をやめて(あの当時、バブルのはじける前だったので、東京に帰ったらまた仕事が沢山あるという自信があったらしい)、「娘と関係を犠牲にして無理して仕事を探して悪くなるようなことをしない方がいい」と家族とのコミュニケーションを深めるのに、主婦という最良の方法を選んだのは、正解だったと思われる。近年、仕事を探すのは難しい状況にあるが、家族ともしっかり「狭く、深く」という付き合いを選べる人はそういない。

更に、家庭観を知るために家族への奉仕によって何かを犠牲にしたかどうか聞いた。彼女は当時「仕事をやめてもったいない。」と皆に言われたらしい。でも、娘との良い関係の方がずっと大切だったと彼女は言う。確かに他人からもったいないと言われることで、自分の考えとは違う方向に進む人が多い中、彼女は、自分の最良の方向を見つけて進んできた。それに後悔することなく、常に楽しいと思っている。彼女は、なんのしがらみもなく自由に、自分の思ったとおりに生きていくことができる自己を持った強い人なのだと改めて感心した。

2 - 4 : 疲労と元気の源

ここで、筆者はまた話を切り替える。人生に疲れたことはあるかどうかについて聞いてみる。

「ある時期しょっちゅう疲れていた」

と言う。20代後半は全て中だるみだったらしい。

「それまでは中学も高校もずっと思うように順調に進み、思うように、大学も入ったけど、ある時やっぱり疲れちゃったと思って...周りには順調だと映っていても、次は何だろう。次は何だろうと焦っている感じもあった。」

とても分かりやすい言葉。周りが見る自分と実際の内面が全然違う。周り自分との間のギャップを理解してくれる人が必要だ。その意味で「狭く、深く」という友人は貴重な存在となるだろうと筆者はここで考えた。さらに

「自分の存在を感じられなかった」

というので、確認すると抽象的だが家から離れて自己確認ができなかった、でも離れなければそれさえが分からなかったから感謝していると言う。

こういう風に自分に問いかける人は、常に自分を意識している人である。自分というものを持っていなければ、こういったことはできない。だから自分を持たない人とは「狭く、深く」という付き合いはできなくなるのだろう。彼女の心の内が少し理解できたような気がする。

次に、元気の源について聞いてみた。それで体の元気と心の元気はつながっており、体を動かすことで丈夫になり、気分転換できると言う。

「いつも切り替えが必要で、切り替えポンポンポンとこう切る、自分の時間を切るとやっていけるの」

と切り替えから元気の源が湧いてくるのかとわかった。

どうしても、コミュニケーション観に興味がある筆者は、「色んな人とコミュニケーションをとると、元気になるか、または元気を失うことになるのか。」と質問をすることにした。

「日本語学校に通う人たちが、生活のために一生懸命がんばっているのを見るだけでエネルギーをもらっている。」

と言う。つまり、日本語学校での生徒とのコミュニケーションさえもが、彼女に元気さを与えてくれるのだ。なんとというポジティブな思考。

「深い、狭い」関係にこだわりつづける筆者は、「人と仲良くなろうとする時は、浅い関係か、深い関係のどちらの方で元気が出るのか。」と聞いてみた。浅い関係に関して、「何のためにお茶飲んだのだろう。私こんなことで時間をつぶさないで家に帰って、その辺歩き回った方がずっとよかったなあ。」

彼女の回答はとても分かりやすかった。

ここでも「浅く、広く」というつきあいよりも、「狭く、深く」というつきあいを心底望んでいるのが感じられる。

次に、最も幸せだと思う時について聞いた。それは深い関係を築けた時だろうか。

「深い関係を築けたのもそうですし、それから私の周りの友達など、私の好きな人を含めて、その人が私に直接関係無くてもうまくいった時やっぱりうれしい。ああしんどいなあと思ったことを乗り越えた時、そういう友達がいるとうれしい」

と友人のことをそこまで考える人ってそういない。友人のことまで、まるで自分が自分の家族のように思えること自体、びっくりさせられた。「狭く、深く」というつきあいの見本だと感じた。

2 - 5 : 視点の違い

このインタビューで明らかになったことは、彼女は人との付き合いをうまく使いわけているようだった。「狭く、深く」という関係の人とは、とことん友情を深め、家族との絆を普通以上に大切にしている。逆に「浅く、広く」という関係の人とは、ほとんどつきあわないようだ。「浅く、広く」という人は、込みいった話など一切できないし、話をしていてもつまらない。そういった人たちを無意識のうちに敬遠して、人とつきあいをしている。本音で「狭く、深く」付き合える人以外は、彼女にとって、ただの人なのだ。「浅く、広く」といううわべだけの付き合いの人に尽くしても、それが自分に返ってくることはごく稀だ。しかし、「狭く、深く」というつきあいの人には尽くした分、相手もそれに応えてくれる。お互い助け合うことができる。それにお互いの「魅力」というのもわかりあえる。

また、彼女は、一般常識への反発からか、自分がこうしたい、ああしたいという考えを強く持つようになったという。自分の意思があっても、周りの意見に影響されて、自分の自由を失われる人が多いのにもかかわらず、彼女は強い意思を持っているので、自分の好きなこと、興味を持ったものに情熱を傾けることができる。人のいい影響だけを受けて、その人たちからエネルギーを得て自分を更に大きく成長させているようだ。

今回のインタビューでは、彼女のコミュニケーション観に焦点をしばって「深く」つきつめていくつもりだったが、彼女は、いかに人生において自分を楽しむかということに焦点をあててインタビューに答えた。お互いの視点のズレがあったようだ。前向きで好奇心旺

盛な姿は本当に魅力的で、私も自分の人生楽しめるような何かを見つけなければと考えるようになった。しかし、このインタビューの動機は「コミュニケーション」がキーワードになっている。私は、彼女のコミュニケーション観をもっと追求し、更なる魅力に気づくことができるよう努力したいと思い、再度コミュニケーションに的を絞ってインタビューしようと考えた。私自身において、自分のコミュニケーション観を見直す良いきっかけを得ることができるだろう。

私にとってのつきあいで、「広く、浅く」というのは、いわゆる社交辞令の関係を指している。さほど親しくなく、知り合いの枠から出ることのない関係、と位置付けている。

逆に、「狭く、深く」というのは、お互いの心の内、気分、その時の状況など様々なことを理解し合え、利害関係なしに助け合うことのできる、また心休まる関係だと思っている。「狭く」というのは、特定の2,3人にしぼるというつきあいを指すのではなく、「広い」社交辞令の世界から隔離された存在ということだと声を大にして言いたい。

インタビューした彼女は、「広く、浅く」という社交辞令の関係を忌み嫌っている。社交辞令という関係を除いた「狭く、深く」という関係を友人と築き、その上で自分の人生を謳歌する、という交際手法に魅力を感じたのだが、彼女と私の「狭く、深く」という価値観があまりにも異なっていて、結果として、お互いのコミュニケーション観を確認できないまま第一インタビューを終えてしまった。

2 - 6 : 4つの形容詞

最初のインタビューでは、全体像を探るべく経歴をはじめ、交友関係、家庭観、自己分析、趣味、人生観という様々な質問をしたが、次にコミュニケーションだけに的をしぼり、この点に関して彼女が、筆者にあれほど強い印象を与えた理由を探し当てる必要があったと感じた。

まず、「広く、浅く」という関係について聞くことにした。その場所やグループだけで人と接触する時成り立つ付き合いと言う。彼女はこれを“普通の付き合い”と呼んでいる。一方、自分がその場所に存在していなくても続いている付き合いは“普通”ではない付き合いであり、いわゆる「深くて、狭い」だろう。

次に、最初のインタビューであまり詳しく聞けなかった「深く、狭く」の関係について話を進めることにした。

「私がいなくても続いている関係、何年会っていなくてもどうしているかなと思う関係」。

理由を聞くと

「その人が好きだから...」

と言う。

「この人とやっていけるなあ」

という人と深い関係を築けると言うが、「やっていけるなあ」と気が付いたとき、自分からどのように働きかけ、もっと深いもっと狭い関係を作っていくかという彼女の考え方をもっと探ろうとした。どうしている？と手紙を書いたり、電話したりすることで相手は自分の気持ちを感じて答えてくれる。こういうことをしようとするというわけではないが、自然に出来る関係。お互いに出たり、ひいたりする関係で、人間同士のコミュニケーションだから、インターアクションがどうしても必要で、一方的な関係はうまくいかない。

筆者は、「広く、浅く」という関係はあまり好きではない。人と知り合ったとき、「この人のことをもっと知りたい」と、常に「深く、狭く」という関係になれるよう、コミュニケーションを深めていこうと努力するのだが、彼女が人とつきあう上で、「深く、狭く」という関係を築きたい人とは、どのようにその方向へ持っていこうとするかということを知る。ここでとても重要だと思われる返事

「その人に対してまず素直になる」

が返ってきた。

「肩肘張らないで困った時に助けてくれる？お願いできる？とボンと言ってみることも重要。それで相手の出方で私を信頼してくれているかどうかをすぐ感じる。それを感じた時、その人に対して出て一步踏み出す。」

インタビューする前にそんな事を考えている、しているなんて思ったことがない。言葉にして話してみないと分からないことが多い。今まで素直になろうとか、こういうことをしようとしていたわけじゃなくて、ずっとそれまでの経験と備蓄でこれを無意識にしていた。無意識だったので、コツを掴んでいるわけじゃなくて、それを人に話すことが出来ない。

「素直になって、この人が好きだなと思うこと。」

お互いに認め合えることが重要。自分をその人の前で肩肘張ってないで出せること。相手もそうしてくれているなあと分かる。相手に同じ事を求めてしまうと相手はしんどくなる。求めなくても答えてくれる関係が理想的。そういう関係が一朝一夕でできるわけじゃない。早くても何ヶ月かかる。年の単位をかける時もあるけど、たまに築き上げたと思ってもある時崩れることもある。

2 - 7 : コミュニケーションの意味と意義

次に彼女の中での「コミュニケーション」の意味と意義について質問する。考えたこともなかったのが、非常に難しい質問だ。言葉に置き換えるのが非常に難しい。コミュニケーションがないとお互いが成り立たない。日本的に言うと阿吽の呼吸のようなもの。口に出さなくても分かる。コミュニケーションの意義は、自分が思っていることを相手に伝える、分かり合うために話をするだけなのだろうか。ここで筆者は自分なりのコミュニケーション観を述べた。コミュニケーションは、人あつての自分だと思い、周りに人と良い関係を築きネットワークを作っていくことが一種の生き甲斐だと。彼女は、

「生きている自分の基本をしっかりさせること。それによって伝えることを分かり合う、築いてきたもの、築いていくものを作り上げるための手段。私はここに存在しているという事を自分で意識するため。私が存在するには、私一人では成り立たない。コミュニケーションを取りながら、自分自身が存在することを確認する。相手を確認して、相手に確認してもらって、お互いの存在を認め合う。コミュニケーションは目的ではなくて、手段。自分とのコミュニケーションもあり、自分とお話をしながら自分を認めていく。自分がこういう存在だな、頭の中で意識していき、言葉として表す。それがコミュニケーション。」

だと言う。彼女にとってコミュニケーションとは、自己確認、自己認識の手段なのだろう。しかし、それだけなのだろうか。筆者は彼女の意見を聞いて、コミュニケーションという言葉、行為ほど千差万別なものはないのでは、と考えるようになった。彼女のように自分を中心としてコミュニケーションをとる人もいれば、他人を中心とする人もいる。中心を移すことによって様々な角度からコミュニケーションがとれるはずだ。また、言葉が通じる相手だけでない。言葉が通じなくてもお互いの気持ち、態度だけで信頼関係を築きあげることができる場合もある。コミュニケーションとは、なんという奥の深さ、多様なものであろう。筆者は、コミュニケーションについての意義と意味について、インタビューの間更に悩むこととなる。しかし、最後の質問の答えで、その疑問から解放されることになる。最後の質問は、個人的なものである。「あなたと私は、これまでいい形で「コミュニケーション」の関係を築くことができたと思っています。あなたは、私と知り合ってから、どういう形で信頼関係を築こうとしたかなど、いきさつについてお話いただけますか」。今までの話には、どうしても具体例が必要だと思ったからだ。彼女の返事はこうだった。

「深くやっていけるんじゃないかなあ、と思った。そうじゃなければ、モスクワから帰っ

てから関係が終わっていたと思う。それ以上色々なやりとりをしなかったと思う。お付き合いしていける人だなと。このまま終わっちゃうとちょっと惜しい人かなという考えがあって、英語を教えると言って、私は出た、サーシャさんはそれを受けてくれた。続けていけるという気持ちがあった。続いていった。お互いに出た、出てくれた、出た、出てくれたこれこそコミュニケーションだと思う。」

それはお互いに素直になることだ。

3．結論：技術より心

このインタビューで、まず、互いのコミュニケーション観の違いが明らかにされた。彼女は全ての人間を2つの山に分けている。一つは「狭く、深く」付き合う小さな山と、「浅く、広く」人と接するととても大きな山だという。筆者は全ての人間を一つの塊として捉えており、その塊の中から相手を選び出し、様々な形で相手とパイプをつなぎ関係を深めていく。このようなコミュニケーション観の違いについて話し合った結果、大きな達成感を得ることが出来た。

今までの筆者は、コミュニケーションの分野では、心より技術に注目していたことが大きな失敗だったかもしれない。本当の姿をなるべく隠して、キザな関係を求めている。しかし、これでは相手に認めてもらえなかったり、相手を戸惑わせたりして、「狭く、深く」という関係に発展させることができなくてもしょうがない。このインタビューに臨む際、彼女は最初から自分の思うことを伝える「素直さ」を持っていた。そのことで、筆者は、コミュニケーションに関して、虚飾に捉われていて、「素直さ」「自然体」でいることという最も大事なことを見逃してしまっていたことに気づかされた。しかし、「素直さ」や「単純さ」に対して、いつも一種の羨望のまなざしのような気持ちを抱いていたことは事実である。この話し合いがなければ、形式に走りがちな筆者はそれに気づくことがなかった。形式だけを追及し、中身を失わないようにということは、今後、人とのコミュニケーションに関する大きな課題であり、常に気をつけるべきことであろう。

彼女から、コミュニケーション、人生の楽しみ方、向上心の持ち方など、さまざまな生き方のヒントを得ることができた。これらのヒントから、人とのつきあいにおいて、すなわちコミュニケーションにおいて、退屈極まりない社交辞令のみの関係を減らすことができるのではないかと、もっと多くの人と「信頼」という名で成り立つ関係を培っていくことができるのではないかと、という気がした。

おわりに

彼女は、私のインタビューに対して、真摯な気持ちで望み、質問に明確に答えてくれ、互いの意見交換に応じてくれた。このことで、私と彼女は、これまでより更に「狭く、深く」という信頼関係を築くことができたと思っている。そして、相手を尊重し、自分も尊重し、いつも「素直な気持ち」で相対しあう重要性を、彼女の「魅力」から教わった。非常に有意義な活動で、私は人間的成長を遂げることができたと確信している。

さて、この活動の目的である「日本社会に暮らすこととは何か」について述べたい。このレポートを書くにあたって、筆者はインタビューに応じてくれたOさんを日本社会の代表として捉えていない。代表というより、この多様な日本社会の一市民に過ぎないのだ。その「社会」と呼ばれる共同体になんらかの決まりがあるのだが、個人にとって「社会」は周りの人たちであり、その人たちとどううまくコミュニケーションを行い、付き合っていくかがひとつの問題なのである。Oさんは、インタビューで社会の束縛について語っているが、社会とは何かという問いに対して戸惑いを見せた。しかし、筆者は彼女のコミュニケーション観を知ることにより、人間は社会を相手にしているのではなく、自分自身が

築いていくネットワークに大いに依存していることが分かった。自己表現を行い、他人との関係を築いていくことで人間は初めて達成感を得、幸せになるのだだろうと確信した。

この活動は真剣に取り組むと大きな成長を促す、そして完璧なものがないという事実を執筆者に突きつける気がする。そして、何より人間の本質を表すところがあると思う。一人で考えても上手くいかない。自分が大発見をした気持ちでも、それを人に伝え、理解してもらうことの難しさを痛感した。

この短い活動で、皆と面白い体験を分かち合うことができ、楽しい時を過ごした。この活動の理念を打ち立てた細川先生、最初から最後まで刺激を与えたくれた三代さん、とんでもない理屈（それは私らしいそうだが）から始まり、自分自身が納得するまで文章を真剣に読んでくれた皆さん、読んで自分の発言にしばしば恥ずかしさを覚える記録をとってくれた塩谷さんに感謝している。最後に、このインタビューにご協力下さったOさんに厚く御礼申し上げます。お疲れ様でした！そして、どうも有難う。